

## 有松の小路（こうじ）

有松は、東海道を行き来する旅人への絞りの販売で発展した町です。街道沿いには絞り商家が立ち並び、その背後には藍の染め場など絞り生産場所が設けられ、そこへ通う多くの小路が出来ていきました。

幸いなことに、それらの多くは現在もほぼそのまま残っており、江戸時代の絵図にも描かれています。それらは今でも当時の名称で呼ばれています。また、新しく名付けられた小路もあります。それら小路の由来や説明を一部ですが紹介します。

### ①長坂道（ながさかみち）

祇園寺前から桶狭間に至るまで延々と長い坂が続いていたことから「長坂道」と呼ばれています。また、有松に東海道が通る以前から存在する道で、桶狭間道とも刈谷道とも呼ばれていました。

知多郡有松村絵図（天保12年（1841年））にもその名を見ることができます。

長坂道は藍の道でもあり、道周辺には明治末期まで大小さまざまな藍染工場がありました。

（「有松よもやまばなし」17号より）



### ②切通し（きりとおし）

有松東海道から有松天満社に至る参道で、小高い山を切り開いた道です。入り口には、灯籠一対が建てられています。建立は天保13年（1842）で、正面には、文章嶺（ふみのみね）と刻まれています。文章嶺とは、寛政の初め、祇園寺僧侶卍瑞の開基にして、数千人より捧げし詩歌文章をこの山頂に埋納したことにちなんでいます。（1790年頃）

天満社は、文政七年（1824）、この文章嶺に八ツ棟造りの高廟を建て、祇園寺にあった神廟を移し、現在に至っています。（教育委員会報告書「有松まつり」より）



### ③河竹小路（かわたけこうじ）

両河村家に挟まれた狭い小路です。左右の美しい町並みに目を奪われて、だれも見落とししてしまいそうなひっそりとした心落ち着く小路です。少し奥に入って振り返り眺めると、明るい東海道をひとが一人、また一人、東へ西へ行き来する風情はいにしえに遡ったかのような錯覚を抱かせてくれます。また、名古屋の女子高校生が書いた小説『1980 アイコ十六歳』が映画化された時、撮影された小路です。「河竹小路」の名は、川村屋の一番番頭河村竹次郎が独立、絞商を営んだところから呼ばれています。

（「有松・桶狭間お宝カルテ」より）



#### ④川村小路（かわむらこうじ）

有松東海道から絞商川村屋の横を通り長坂道に至る小路で、古くから地元の人々は川村小路と呼んでいました。

川村屋は、川村弥平が竹田庄九郎家で修行の後、文化5年（1808）独立し、絞商を創業したのが始まりです。家業が発展するとともに後方南側に6棟の蔵や離れが増築されました。

主屋は平成17年（2005）に建て替えられましたが、蔵や離れはそのまま、昔の面影を残しています。

（有松志ぼり、伝統的建造物調査報告書より）



#### ⑤天王坂（てんのうざか）

以前この坂道を南にのぼる途中に牛頭天王（ごずてんのう）を祀る津島神社があり、地元の人々は「お天王坂」と呼んでいました。

有松区画整理事業で国道1号線と接続するとともに道幅が拡張され、津島神社は天満社の境内に移設されています。



#### ⑥山与遊歩道（やまよゆうほうどう）

山田与吉郎は、明治5年（1872）にここ（現中濱家住宅）で絞りの販売を始め、屋号をヤマヨと称しました。

平成の時代に入って、有松土地区画整理事業が始まり、現中濱家住宅の周りに道がつけられ、街道から手越川まで遊歩道の下に中川が流れ、手越川沿いには柳の木が植えられ、有松駅と東海道を結ぶ遊歩道が出来ました。



山田家の子孫は、この住宅を一時取り壊しを考えたそうですが、先祖からの文化財をなくするには忍び難く、家屋の保存を条件に中濱家に売却されました。よって、山田家子孫の意向をくみ、山与遊歩道と名付けられました。

（伝統的建造物調査報告書、中濱家主人より）

なお、この川は、かつての有松の字名（あざな）の境でもありました。中川橋の東は「橋東」西は「往還」の字名でした。

#### ⑦分かれ道

桶狭間から有松東海道に出る場合、長坂道を使って祇園寺まで行きます。ここは有松村の西のはずれになりますので、近道として地蔵池付近から長坂道から分かれてまっすぐ北に向かい、有松村の東側に出る道が出来ました。これが分かれ道です。知多郡有松村絵図（天保12年（1841年））には、「分レ道」と記載されています。



昭和3年（1928）、「分レ道」が改修され、「大府行縣道」となり、有松東海道との交差点脇に道標石柱「東海道・大府行縣道」が設置されました。その後、石柱は転々と場所が移されましたが、現在は交差点より少し東側に設置されています。

# 有松の小路図

